

中小企業の内部プロセスや外部プロセスが金融機関に対する情報開示目的 および心理的抵抗感に及ぼす影響について

藤井 一郎(筑波大学大学院博士課程後期)

リレーションシップバンキングが地域金融機関に対して発表されてから8年が経過した。しかしながら、依然として中小企業と金融機関の間に存在する、情報の非対称性の縮小については課題が多い。その一方で、ディスクロージャー、リレーションシップバンキング、それぞれの分野での先行研究は多いものの、情報開示を促進させる中小企業の内部プロセスなどに注目した研究は見当たらない。このような問題意識の下、今回の発表ならびにフルペーパーにおいては、情報開示を行う目的や心理的抵抗感を情報開示の積極性に対する媒介変数とした上で、中小企業の内部プロセスや金融機関などの外部プロセスが媒介変数に対して及ぼす影響について分析を行った。

分析は、中国地方5県の経営革新認定企業に対してアンケート調査票を郵送し、293社から回答を得られたデータもとに統計的な解析を行った。被説明変数である、情報開示の目的は、因子分析を行った結果、「情報収集姿勢」、「金融機関の理解度」、「資金調達支援」、「マネジメント支援」の5変数を設定した。また、もう一つの被説明変数である心理的抵抗感の種類については、やはり因子分析を行い、「業績モニタリング資料」、「経営資源資料」、「社内体制資料」の3変数を設定した。説明変数は、中小企業の内部プロセス、外部プロセス、ファシリテーター、財務状況に分けたうえで、特徴的な指標を設定した。

主たる説明変数である中小企業の内部プロセスは、企業家の特性(経営者)、企業家の特性(組織特性)、経営品質、持続可能性、の4変数を設定した。また、外部プロセスについては、金融機関の姿勢(外部対応力)、現担当者(仕事に対する姿勢)、過去担当者(仕事に対する姿勢)、担当者の信頼感、の4変数である。財務状況については、売上高などの財務数値や成長性やROA等収益性、安全性の財務指標に加えて連帯保証の有無などの属性を設定した。

情報開示の目的について相関分析及び重回帰分析を行った結果は以下である。主たる被説明変数である「資金調達支援」については、内部プロセスにおいては、強い影響を及ぼしている要因は見られなかった。外部プロセスでは、担当者の信頼感が影響を及ぼし、財務状況では売上高や成長性、自己資本比率が影響を及ぼしていることが検証された。また、外部プロセスである担当者の信頼感は、開示目的である4つの被説明変数について、「資金調達支援」のほか、「金融機関の理解度」、「マネジメント支援」についても影響を及ぼしていることが判明した。

次に心理的抵抗感について相関分析や重回帰分析を行った結果は以下である。主たる被説明変数である「業績モニタリング資料」については、内部プロセスでは、企業家の特性(組織特性)や持続可能性志向の高まりが心理的抵抗感を軽減していることが検証された。外部プロセスでは、過去担当者(仕事に対する姿勢)が影響を及ぼし、財務状況などでは、連帯保証の有無が影響を及ぼしていることが判明した。また、内部プロセスである、持続可能性志向は、心理的抵抗感の3つの被説明変数について、「業績モニタリング資料」のほか、「社内体制資料」についても影響を及ぼしていることが判明した。やはり、内部プロセスである企業家の特性(経営者)は、「社内体制資料」を開示する際に生じる心理的抵抗感を高めることが検証された。